
桜色の明日

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜色の明日

【コード】

N9455W

【作者名】

かじ

【あらすじ】

勉強もスポーツもなんとなくできて、可愛い女の子ともなんとなく付き合ってる、中学3年生の智哉。このままぼんやりと、退屈な毎日を過ごしていくはずだった。夕暮れの踏切で、10歳年上の彼女と出会うまでは……。 「頑張らない」中学生が恋をして、少しずつ大人に近づいていくというお話です。

夕暮れの空に響く踏切の音。

それはどこか物悲しくて……秋から冬へと向かっていく、この季節は特に……。

下りた遮断機の前に立ち、一人でその音を聞いていると、無性になんか恋しくなってしまう。

けどそんなこと、誰かに話したら笑われそう、僕はその気持ちを胸の奥に閉じ込める。

最近、陽が落ちるのが急激に早くなった。

買い物帰りの人たちはみんな急ぎ足で通り過ぎ、カレーや焼き魚の混じり合ったような匂いが、どこからともなく漂ってくる。

中学校の制服を着た僕は、警報機が鳴り止むのを今日もじっと待っていた。

さつき触れたばかりの、彼女の柔らかな唇の感触を、なんとなく思い出したりしながら……。

線路の向こう側に女の人が見えた。

スーツを着て髪をひとつにまとめた、どこにでもいるようなOL風の人。

いつもだったら僕はそのまま目をそらし、その人の姿は茜色の景色の中へまぎれてしまっただろう。

だけど……僕はそこから目が離せなくなっていた。

僕の目の前を、風と音を立てて快速電車が通り過ぎる。それは一瞬のことなのに、その時の僕にはとても長い時間のように思えた。

遮断機が上がる。

止まっていた時間が動き出すように、車や人も動き出す。僕はその場に突っ立ったまま、あの人の姿を捜す。

いた……。

線路の向こうから、顔を上げてまっすぐ歩いてくるその人は、もう泣いていなかった。

「美優も、トモとおんなじ高校行きたいなー」

ストラップのいつぱいついたスクールバッグを、意味もなくぶらぶら揺らしながら美優が言う。

「トモ、第一志望どこにした？」

「麻高」

「げっ、マジで？ 美優、絶対無理だしー」

このあたりで二番目に頭のいい学校名を口にしたら、美優は目を丸くして首を振った。

「別に麻高じゃなくてもいいけど？ 美優が行ける学校にしてもいいよ」

「……なんかその言い方、ムカつくわ」

ムカつくって言われてもなあ……本当に高校なんてどこでもいいし。

自慢じゃないけど、僕は勉強しなくても、ある程度勉強ができた。だからこのくらいのレベルの学校なら、そんなに頑張らなくてもたぶん行ける。

ついでに僕はスポーツもできた。部活に入って遅くまで練習してるわけでもないのに、野球もサッカーも適当にできて、体育祭ではいつもリレーの選手だ。

だいたい汗を流して頑張るのって、だるいし、ダサすぎでしょ？

「だからトモのそういうところが、ムカつくの」
美優はわざとらしく、ぷくーっと頬を膨らませる。

「なんにも頑張ってるのに、なんでもできちゃうと」

「しょうがないだろ？ できちゃうんだから」

美優が「くやしー」って言いながら、僕の背中をばんばんと叩いた。

美優は僕の三人目の「彼女」だ。

中三になって初めて同じクラスになった時、美優から「付き合っ
て」と言われた。僕はすぐに「いいよ」と答えた。

他に好きな子はいなかったし、美優はなかなか可愛かったから。

それから毎日一緒に帰って、休みの日は二人で遊んで、キスをしてエッチもした。

そうなるのは思ってたより全然簡単で、美優も喜んでたし、なんとなくこんなもんかかって感じだった。

朝起きて、ご飯食べて、学校行って、授業受けて、友達と騒いで、
美優とキスして、家に帰って、またご飯食べて寝る……僕の毎日は
こうやって過ぎていく。

今までも、これからも、こうやって過ぎていく……はずだった。

僕が「あの女」と出会うまでは……。

家に帰ると、玄関に女物の靴がそろえてあった。

また勇哉の彼女が来てるのか……そんなことを想像しながら靴を脱ぐ。するとリビングから、家族団欒って感じの笑い声が聞こえてきた。

「あら、トモ、お帰りー」

普段より数倍ご機嫌な母さんが、料理をテーブルに並べながら僕に言う。

なんか変だ……。

いつも帰りの遅い父さんが、くつろいでビールなんか飲んでるし、残業で遅いはずの宏哉兄さんも座っていて、その隣には僕を見つめる女の人……。

「トモ、この方、宏哉の『彼女』さんですって！」

僕の耳に勝手に舞い込んでくる母さんの声。でも僕にはそんな声どうでもよかった。

それより……そんなことより……この人は……。

「初めまして。三好小春っていいます」

そう言っつて、踏切の向こう側で泣いていた女の方は、僕の兄さんの隣でにっこり微笑んだ。

「けど、あのクソ真面目な宏哉に女がいたなんてなー」

買ったばかりのギターをいじりながら、僕の前で勇哉が言う。

ちなみに勇哉は五歳上の二番目の兄。一番上が宏哉、勇哉よりもさらに五歳上。僕たちは男ばかりの三人兄弟だった。

「ちよつと気が強そうだったけどな」

「……そうかな？」

勇哉が僕を見てにやりと笑う。

「それに美人だった」

「ん……まあ」

「宏哉のヤツ、よくあんな美人つかまえたっつーか、よく宏哉なんかと付き合ってくれたよな」

俺のほうがよくぼどイケてんのにって、勇哉が付け加える。

勇哉はうぬぼれ屋で態度がデカくて、宏哉のことをちよつと上から見ている。そういうところが僕も似ていて、美優に言わせれば「ムカつく」んだと思うけど。

「俺、あの人に会ったことあるよ」

「え？ 小春ちゃんに？」

勇哉が僕の顔を見る。

「会ったというか……すれ違ったただけなんだけど」

「この近所に住んでるって言ってたからな。会っても不思議はねえか」

勇哉はふつと笑って、どうでもいいように僕から目をそらし、スピーカーの音量を上げた。

タバコ臭い勇哉の部屋に、僕の知らない曲が流れる。

僕はぼんやりそれを聞きながら、あの日のことを思い出す。

夕暮れの街で会ったのは……踏切で一人泣いていたのは……あの小春さんだった。

さっき、小春さんを囲んで夕食を食べた。

母さんは終始「ご機嫌で「好きな食べ物は何に？」とか「お勤めはどちら？」なんて彼女を質問攻めにしている、僕はうんざりしていた。

頭がよくて、いい大学に入って、いい会社で働いている宏哉は、母さんの自慢の息子だ。

「ただ「モテない」ってことが、唯一母さんの心配の種だったから、初めて彼女を連れてきた息子のことを、喜ぶのは無理もない。でも「彼女」だったら、僕にも勇哉にもいるんだけどな。」

帰り際、宏哉が車のエンジンをかけに外へ出た時、一人になった小春さんに声をかけた。

「あの、えっと……すみません」

小春さんは振り向いて僕を見た。

「ん？ あたし？ 小春でいいよ」

「えっと……じゃあ、小春さん」

「はい？ 何かしら、トモくん」

大人の余裕つて顔つきで、小春さんが僕に笑いかける。

「俺、小春さんに会ったことありますよ」

「え？ あたしに？」

小春さんは少し考えるしぐさをしてから、またにこつと微笑んだ。

「ごめんね？ どこで……会ったかな？」

「いや、覚えてないならいいです」

「覚えてるわけないか。「会った」というより「すれ違った」だけなんだから。」

「だけど……けどあの時、泣いてたよね？」

「どうして泣いてたの？ 誰に泣かされたの？」

「道端で本当に涙を流す人、僕は初めて見たんだ。」

宏哉が外から小春さんと呼んだ。

「じゃあ、またね。トモくん」

小春さんが言って玄関から出て行く。僕は黙ってその背中を見送った。

「んっ」

キスした唇を離してから、もう一度チュって彼女の唇に音を立てる。

美優はちよつと顔を赤くして「トモ、だいすき」って僕に笑う。

「じゃあねっ」

「うん」

短いスカートをはひるがえし、帰ろうとした美優が、僕に駆け戻って耳元でささやく。

「テスト終わったらエッチしようね」

ふたつに結んだ髪をぴよこんと揺らして、顔の横で小さく手を振る美優。

僕が手を振り返したら、美優は満足そうな笑顔で走って行った。

エッチしようね……か。

誰もいない公園を出て、住宅の間を歩く。

上手なキスの仕方、エッチの時の避妊の方法も、聞いてもいないのに勇哉が教えてくれた。

だから僕は周りの中学生より、ちよつとだけ上手く女の子を喜ばすことができる。

だけど……だけどそれだけだ。

うさぎみたいにぴよこぴよこ跳ねる美優はかわいいけど、美優じゃなくても僕はいい。

美優が好きかと聞かれても、たぶん僕は答えられない。

少し歩くと踏切の音が聞こえてきた。だけど今日はどこかが違う。

ああ、そうか。空が青いんだ。

テスト一日前の今日は、授業が午前中で終わりだった。

「トモくん？」

ぼーっと通り過ぎる電車を見送っていた僕は、その声に弾かれるようにして振り向いた。

「やっぱりトモくんだ」

自転車に乗ったまま、僕の前でいたずらっぽく微笑む人は、あの小春さんだった。

「もう学校終わったの？」

小春さんが自転車を押しながら、僕の隣を歩いている。

真つ昼間に十歳も年上の綺麗なお姉さんと歩く僕。それはまったく予想外の展開だった。

「テスト前は半日なんです」

「なあんだ。サボったわけじゃないんだ」

そう言っつて小春さんはあっけらかんと笑う。

なんか、意外と……アレだな。

最初会った時はビシツとしたスーツ姿で、この前うちに来た時は女らしいロングスカートをはいていた。でも今日は、黒いタートルネックのニットにデニムのパンツ。

そしてその格好が、一番この人に似合ってるような気がする。もしかして性格も、勇哉の言うとおりに、さっぱりした人なのかもしれない。

「小春さんこそ、仕事は？」

僕の質問に小春さんはふふんと鼻で笑う。

「あたし仕事辞めちゃったからプーなのよ。ちょっと体調崩してね。この前キミの家に行った時に話したけど？」

そうだったけ？ あの日はかなり動揺していて、肝心なことを何ひとつ聞いてなかったことに今気づく。

「えっと、じゃあ今日は何しにうちに？ 宏哉兄さんなら会社のはずだけど？」

「今日はお母さんに会いに。ほら、この前言われたでしょ？ 宏哉がいない時でも、気軽に遊びに来てねって」

だからってその言葉通り、兄さんのいない家に来るかな、フツー？ そう思ったけど、小春さんはにこにこしながら、自転車の前かごに載せてある、お弁当らしき包みを指さしている。

「あっ、でも、トモくんもいるなら、お寿司もう一個買ってくるんだった」

「いや、いいです。俺、お寿司嫌いですから」

「えっ、うそ。こんなに美味しいのに……でも、ヒロとおんなじね」
ヒロとおんなじ……ヒロ……小春さんは宏哉のことをヒロって呼ぶんだ。宏哉の……彼女だもんな。

そんな当たり前のことを考えながら、僕は小春さんと歩く。
遠ざかっていく踏切の音。保育園の園庭で遊ぶ子供たちのはしゃぎ声。

いつもの道を歩いているだけなのに、なんだかいつもと違っていた。

リビングから笑い声が聞こえてくる。

僕は教科書を閉じ、書きかけのプリントをぐしゃっと丸めポケットに突っ込む。

そしてわざとらしく音を立てて階段を下り、母さんたちのいる部屋をのぞいた。

「あ、トモくん、ごめんね？ うるさかった？」

僕の不機嫌そうな顔を見て、そう言ったのは小春さんだった。

「いいのよお。静かにしてたって、どうせこの子は勉強なんかしやしないんだから」

母さんが笑いながら寿司をつまんでいる。

はあ？ それが受験生に言う親のセリフか？ だけどそんなのはもう慣れっこだから、僕は何も反論しない。

母さんが期待してたのは、長男の宏哉だ。

勉強する時は宏哉につきっきりだったこと、まだ小さかった僕でも覚えてる。

そして宏哉は母さんの期待どおりの成績を収め、期待通りの学校へ行き、期待通りの会社に就職した。

次に母さんが期待してたのは、次男の勇哉だ。

だけど勇哉は言うことをきかなかった。

俺は俺のやりたいことをやるとか、口だけはカッコイイことを言っ
て、今はバイトをしながらバンドなんかやってる。世間で言うフ
リターってやつ。

初めのうち、そんな勇哉に口うるさかった母さんも、今はもうあ
きらめているようだ。

そして母さんは、僕には期待するのをやめた。また裏切られて、

シヨックを受けるのが嫌なんだろう。

期待通りに育ってくれる息子は、一人いればいいと思ったのかも
しれない。

どっちにしるそんな僕のことを「恵まれてるな」って勇哉は言う。
そうなのかな……そうなのかもしれないな。

僕は僕の好きなことをやって、好きに生きればいいんだ。

それに文句を言う人は、誰もいない。

やかんでお湯を沸かしてカップラーメンを作る。

母さんのおしゃべりを聞き流しつつ三分間待ってたら、いつの間
にか隣に小春さんが立っていた。

「甘いものは嫌い？」

すつと伸びる小春さんの細い指。その指先と一緒に、皿にのった
一人分のチョコレートケーキが、カップラーメンの横に並ぶ。

「嫌い……じゃない」

「やっぱり。ヒロとおんなじ」

そう言っつて小春さんがにこつと微笑む。

なんでも宏哉と同じにされるのは、なんとなくシヤクだけど、僕
はそのチョコレートケーキをありがたく受け取る。

「それ、小春さんの手作りなんだって。お店で売ってるケーキみた
いね」

リビングから聞こえる、母さんのご機嫌な声。

「小春さん、お菓子なんか作れるのねえ。きつといいお嫁さんにな
るわよ」

「そんなことないですよ」

「ねえ、結婚したら同居なんてどうかしら？　むさ苦しい男どもは
追い出すから」

ちよっ……結婚とか同居とか、勝手に話進めるなよ。しかも男は
追い出すとか言ってるし。

「子供が生まれたら、私が孫の面倒みてあげるわよ？　最近共働

きの夫婦が多いんでしょう？ 私の友達もそうしてるの」

「そう……なんですか」

小春さんが息を吐くようにつぶやいて、軽く笑った。

ほらな、完全に引いてるじゃんか。

「母さん」

「なによ？ トモ」

僕はポケットの中から、ぐしゃぐしゃに丸めたプリントを取り出す。

「志望校書いたら、親の印鑑もらってこいだってさ」

母さんは僕の書いた学校名を見て、あからさまに渋い顔をした。

「あんた……こんな学校しか行けないの？」

そこは美優が行こうとしている学校だった。僕は麻高から三つラックを落として、そこに書き替えた。

別に高校なんてどこでもよかったから。

「いいだろ。早くハンコ押してよ」

「まったくもう。どうして今、こんなもの出すのよ」

ぶつぶつ言いながら立ち上がる母さん。僕はその隙に小春さんにささやいた。

「今のうちに帰っちゃいなよ。あの人の話、まとも聞いてたら夜が明けちゃうよ？」

小春さんは僕の隣でふふつと笑う。

「そうかもね。でも楽しかった」

そして印鑑を捜している母さんの背中に声をかけた。

「すみません。あたし、そろそろ失礼させていただきますね」

「あら、やだ、小春さん。まだゆっくりしていつて？」

「今日はこの後予定があつて。また今度、お邪魔させていただきます」

「そう？ 予定があるなら仕方ないけど」

母さんは本当に残念そうにつぶやく。

男ばかりの家庭に女が一人。話し相手が欲しい気持ちもわからない。
くはない。

だけど本当に宏哉が結婚したら、お嫁さんは苦勞するだろうなあ

……。

「それじゃあ……勉強頑張ってたね？ トモくん」

小春さんは子供をあやすかのように僕の頭をぼんぼんと叩いて、
にっこり微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9455w/>

桜色の明日

2011年9月27日13時28分発行